

2011年1月19日

2010年度卒業制作 小熊英二先生

スポーツにおける国民栄誉賞の未来像

～ナショナルスポーツヒーローの表象の変遷から見る、スポーツと国家の関係の考察～

慶應義塾大学環境情報学部4年

五十嵐 悠

t07043yi@sfc.keio.ac.jp

要約

スポーツにおける国民栄誉賞のあるべき姿を明らかにすることが本研究の目的である。そのためにスポーツにおけるナショナルヒーローの表象の変遷をたどり、スポーツと国家の関係を考察していく。

本研究では日本のスポーツヒーローを、国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手として定める。何故ならスポーツにおいてそれは、国家が選手個人に贈る最高の賞であり、また希少価値の高いものだからだ。

1977年の王貞治のホームラン世界新記録とともに始まった国民栄誉賞は、明確な判断基準がなく受賞者の受賞後の人生を保障するものでない二点が特徴として挙げられる。

王貞治は、国民栄誉賞受賞をするとともに、ナショナルスポーツヒーローとしてメディアに表象された。その姿は、「記録」、「努力」、「人格」、「関係」の四点から表象された。表象の理由として国民がナショナルヒーローに、“抜群の実力”を持っていて、“理想とする努力”をしており、“期待する人間像”であり、同時に“理想とする人間関係”を兼ね揃えている人物を求めていたからである。これらナショナルヒーローの要件が、ナショナルスポーツヒーローの表象と相互に絡み合っていた。

表象の方法はそれ以降の山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士にも継承される。つまりナショナルスポーツヒーローの表象、ナショナルヒーローの要件は1980年代も変わらなかった。

しかし2000年に国民栄誉賞を受賞する高橋尚子では、「努力」と「関係」の表象が変わった。また「女性」という新しい表象も加わった。変容の内容は昭和のただやみくもにでも困難を乗り越える「努力」から、楽しく科学的な「努力」の表象に。「関係」は家族や故郷中心の表象から、家族以外のコーチという「関係」の表象に移った。変容の要因は「努力」はバブル崩壊からの経済低成長、「関係」は「女性」の表象を踏まえたジェンダーに見出せる。

国民栄誉賞の性格と昭和のナショナルヒーローの要件である「努力」の理想像は、不合理という面で共通する。だが現在のスポーツヒーローは、合理的な「努力」が表象されている。したがって現在の「努力」の表象に合わせ、国民栄誉賞も合理的な賞へと変わるべきである。個人の価値観が拡散し続けている現在だからこそ、一貫性のある賞にしなければならない。

【キーワード】

スポーツ、ナショナルヒーロー、表象、国民栄誉賞、合理性、昭和、国家、努力

【目次】

要約 (p. 2)

序論 (p. 4)

1-1. 問いの設定 (p. 4)

1-2. 先行研究 (p. 4)

1-3. 研究手法 (p. 5)

本論 (p. 6)

第Ⅰ部：国民栄誉賞概説 (p. 6)

1-1. 国民栄誉賞の始まり (p. 6)

1-2. 国民栄誉賞授与の決定 (p. 6)

1-3. 国民栄誉賞の現在 (p. 6)

第Ⅱ部：ナショナルヒーローの誕生 (p. 9)

2-1. スポーツヒーローの表象とナショナルヒーローの要件の関係 (p. 9)

2-2. 王貞治というヒーロー (p. 10)

第Ⅲ部：継承されるナショナルヒーロー像 (p. 14)

3-1. 受け継がれるナショナルヒーロー像 (p. 14)

3-1-1. 山下泰裕というヒーロー (p. 14)

3-1-2. 衣笠祥雄というヒーロー (p. 16)

3-1-3. 千代の富士というヒーロー (p. 18)

3-2. 昭和のナショナルヒーロー像 (p. 20)

第Ⅳ部：受け継がれなくなったナショナルヒーロー像 (p. 22)

4-1. 高橋尚子から見る、変容するナショナルヒーロー像 (p. 22)

4-2. 表象の変容の要因 (p. 26)

4-2-1. 「努力」の変容～経済低成長の時代～ (p. 27)

4-2-2. 「関係」の変容～ジェンダーからの考察～ (p. 28)

結論 (p. 30)

1-1. 立てることが難しくなったナショナルヒーロー像 (p. 30)

1-2. これからのスポーツにおける国民栄誉賞のあるべき姿 (p. 30)

参考文献 (p. 32)

謝辞 (p. 34)

序論

1-1. 問いの設定

これまでのナショナルスポーツヒーローがどのように表象されていたかを探ることを通じて、スポーツと日本という国の関係を考察していく。その上でスポーツにおける国民栄誉賞のあるべき姿を明らかにすることを本研究のテーマとする。

本研究ではスポーツ界の国民栄誉賞受賞者を、ナショナルスポーツヒーローとして定める。何故ならば国民栄誉賞は、スポーツに関して言えば日本国内において、国家が選手個人に贈る最高の賞であり、また最も受賞者が少ない希少価値の高いものだからだ¹。

しかし上に挙げた価値を持つ賞であり世界で活躍する日本のスポーツ選手は増えているにも関わらず、2000年に高橋尚子が受賞して以来2010年12月現在までの間に、一人もスポーツ選手の受賞者は出ていない²。

筆者は、国民栄誉賞とスポーツの相性にこの問題の原因があると考えている。以上の仮説検証を行うために、通時的にナショナルスポーツヒーローの表象を見ていく。メディア研究ジャーナリストである森田浩之は『メディアスポーツ解体 <見えない権力>をあぶり出す』の中で「人々はそれぞれの社会、それぞれの時代において選ばれるにふさわしい者をヒーローに選んでいる。それぞれの時代のヒーロー像の変化には、メディアの発達も大きく関係してきた。」と述べている³。つまりメディアの表象が、国民の抱く期待や理想像と大きく関係があることが分かる。メディアによるナショナルスポーツヒーローの表象も、ナショナルヒーロー像と相互に影響を及ぼし合っている。したがってナショナルスポーツヒーローの表象を丹念に追うことで、スポーツと国家の関係性も明らかとなる。最終的に変遷を通時的に見た結果、時代に即した国民栄誉賞とスポーツのあるべき関係とは何かの問いに答えることを本研究の目的とする。

1-2. 先行研究

スポーツにおける国民栄誉賞に関する研究はほとんど見られない。国民栄誉賞自体の研究も少ない。唯一挙げるとすれば川島の『名誉感覚の日米比較』がある⁴。だがこの研究で

¹ 国家がスポーツ選手を表彰する主なものとして、紫綬褒章と日本プロスポーツ大賞が挙げられる。紫綬褒章は、受賞者が国民栄誉賞に比べ多く同じ年に2人以上選ばれることもあるために、ナショナルヒーローと定義することが難しい。日本プロスポーツ大賞では、毎年受賞者が選出されるが、個人または団体でも表彰が出来るので、こちらも同様にナショナルヒーローを選んでいるとは言えない。

「日本の勲章・褒章—内閣府」<http://www8.cao.go.jp/intro/kunsho/index.html>

「財団法人 日本プロスポーツ協会」<http://www.jpsa.jp/index.html>

² ただこの10年間の間にイチローへの国民栄誉賞授与検討は二度行われている。一度目は2001年にメジャーリーグで首位打者や新人王、MVPを獲得した年。二度目は、2004年にメジャーリーグでシーズン最多安打記録を塗り替えた時である。しかしイチローは二度とも国民栄誉賞受賞を固辞した。

『朝日新聞』2001年10月27日

『朝日新聞』2004年10月8日

³ 森田浩之『メディアスポーツ解体 <見えない権力>をあぶり出す』（日本放送出版協会,2009）P.166

⁴ 川島浩平『名誉感覚の日米比較—オリンピックアスリートの栄光と文化・人種・権力—』2005
中村敏雄編『スポーツにおける名誉や称号』（創文企画,2005）

は、国民栄誉賞を権力以外の側面から語っておらず、2000年以降の話題が中心である。

また日本のスポーツヒーローについての先行研究はいくつか存在する。代表的な研究は橋本の『メディアスポーツヒーローの変容と誕生』という論文が挙げられる⁵。この中で橋本はメディアヒーローの生成過程を、メディアの進歩とともに明らかにしている。しかしその研究ではヒーローの選び方は恣意的である。力道山、円谷、長嶋茂雄をスポーツヒーローと定めているが、根拠がない。またそれら3人の時代が近いために、表象の変遷を追うことは困難だ。

したがって以上の点から本研究で、国民栄誉賞を扱う意義は十分にあると言える。国民栄誉賞の性格を分析した上で、スポーツヒーローの表象を見ていく。また国民栄誉賞受賞者のスポーツ選手をナショナルスポーツヒーローと定めているために、ヒーロー選択の恣意性を排除出来る。さらに通時的に表象を追うことで、スポーツと国民栄誉賞の関係の本質に近づけると筆者は考える。

1-3. 研究手法

研究手法としては資料調査を中心に行う。

具体的にはスポーツ選手が国民栄誉賞をした際に、メディアがどのように彼らを表象していたかを探る。それらのナショナルスポーツヒーローの表象を通時的に対比させる方法を取り、その時代に国民がヒーローに何を期待していたかを考察する。また表象の変遷を追うことで、スポーツと国家のあるべき関係を予測する。本研究におけるメディアとは新聞記事、スポーツ選手を取り扱ったノンフィクション本、選手自身が書いた自伝、スポーツ雑誌を指す。

また国民栄誉賞そのものに関しては、先行研究や資料が少ない。そのために内閣府の方に電話インタビューを行い、国民栄誉賞の規程や特徴を調べた。誰がいつ受賞したなどの具体的な情報は、新聞記事を使い明らかにする。

⁵ 橋本純一『メディアスポーツヒーローの変容と誕生』2002 橋本編『現代メディアスポーツ論』(世界思想社)

本論

第 I 部：国民栄誉賞概説

1-1. 国民栄誉賞の始まり

国民栄誉賞の始まりは 1977 年 1 月、当時の福田赳夫首相が「国民的英雄への国民栄誉賞を贈与」の検討を指示したことがきっかけであった。この時、福田が国民的英雄の例として挙げたのが、王貞治であった⁶。

この年に王貞治のホームラン世界記録 756 号達成が間近となっていた。この記録達成を日本全体で喜びたいと福田は思っていた。しかし、春秋の叙勲制度では対象が 70 歳以上に限定されている。またプロスポーツ選手を表彰する制度が同時になかった。そこで現役でありプロスポーツ選手を表彰できる新たな制度の検討を、福田は要請した。

検討を指示したのは 1977 年 1 月だが、実際に国民栄誉賞の創設が決定したのは、1977 年 8 月 30 日だった。これは王貞治のホームラン世界記録達成のわずか 5 日前であった。

1-2. 国民栄誉賞授与の決定

これから国民栄誉賞受賞者を決定する際のプロセスについて説明する。著者が内閣府大臣官房人事課の方に、電話インタビューで伺った⁷。国民栄誉賞授与と検討を行う際、判断基準となるものは国民栄誉賞表彰規程の他にはない。より正確に言えば、国民栄誉賞表彰規程の目的には「この表彰は、広く国民に敬愛され、社会に明るい希望を与えることに顕著な業績があった者について、その栄誉を讃えることを目的とする。」と記されておりこの目的だけが、選考の判断基準となっている⁸。要するに明確な判断基準がないと言える。

国民栄誉賞の検討や提案は内閣総理大臣、もしくは内閣府大臣のように内閣総理大臣の周りにいる者が行う。その後、内閣で議論を行う。次に有識者を選定し意見を伺う。最後に内閣総理大臣が最終的な判断を下すという過程を経て、国民栄誉賞受賞者は決定される。この際の有識者は非公表となっている。

1-3. 国民栄誉賞の現在

図 1 を参照して欲しい。1977 年設立以来、2010 年 12 月までに 18 人が受賞している。分類すると、芸能関係者が 11 人（うち音楽関係者が 6 人、俳優または女優が 4 人、映画監督が 1 人）、スポーツ選手が 5 人、冒険家が 1 人、漫画家が 1 人、となっている。もともと現役、つまり存命中に与えられる賞として国民栄誉賞はスタートとした。しかし、18 人の中

⁶ 『朝日新聞』1977 年 8 月 18 日

⁷ 著者が内閣府大臣官房人事課の方に電話によるインタビュー調査を行った。
(2010 年 10 月 25 日、2011 年 1 月 18 日)

⁸ 国民栄誉賞規程より引用
国民栄誉賞規程の資料は、電話インタビューで内閣府大臣官房人事課の方に伺った時に、FAX して頂いた。(2011 年 1 月 18 日) 内閣府のホームページなどで掲載されていないが、国民栄誉賞規程は非公表のものではない。

で11人は死後の受賞となっている。

またこの賞の特徴の一つとして、国籍が問われないことが挙げられる。つまり、日本国籍以外でも良いということだ。これは初の受賞者が王貞治であったことが大きい。王貞治は日本国籍でない。

さらに国民栄誉賞は、表彰状および盾となっている。この他国民栄誉賞授与の際に記念品または金一封を添えることが出来る⁹。だが実際には金一封を添えられて国民栄誉賞を受賞した人物はおらず、18人全員に記念品が渡されている¹⁰。年金など授賞日後の、選手の生活を保障するような性格は帯びていない。

図1 歴代国民栄誉賞受賞者一覧（2010年12月現在）

| | 受賞者 | ジャンル | 受賞年月日 |
|---|-----------------|----------------|------------------|
| 1 | 王貞治 | スポーツ選手 (野球) | 昭和52年(1977)9月5日 |
| 2 | 古賀政男 | 芸能 (作曲家) | 昭和53年(1978)8月4日 |
| 3 | 長谷川一夫 | 芸能 (俳優) | 昭和59年(1984)4月19日 |
| 4 | 植村直己 | 冒険家 | 昭和59年(1984)4月19日 |
| 5 | 山下泰裕 | スポーツ選手 (柔道) | 昭和59年(1984)10月9日 |
| 6 | 衣笠祥雄 | スポーツ選手 (野球) | 昭和62年(1987)6月22日 |
| 7 | 加藤和枝 (美空ひばり) | 芸能 (歌手) | 平成元年(1989)7月6日 |
| 8 | 秋本貢 (千代の富士) | スポーツ選手 (相撲) | 平成元年(1989)9月29日 |

⁹ 国民栄誉賞表彰規程より引用
規程の表彰の項目に記されている。

¹⁰ 以下の新聞記事から調査。

『朝日新聞』1977年9月5日、1978年8月5日、1984年4月19日、1984年10月9日
1987年6月23日、1989年7月6日、1989年9月29日、1992年5月28日
1993年2月26日、1998年7月7日、1998年10月2日、2000年10月31日
『毎日新聞』1992年7月29日、2009年1月24日、2009年7月2日
『読売新聞』1996年9月3日、2009年12月23日

| | | | |
|----|----------------|------------------|-------------------|
| 9 | 増永丈夫 (藤山一郎) | 芸能 (歌手) | 平成4年(1992)5月28日 |
| 10 | 長谷川町子 | 漫画家 | 平成4年(1992)7月28日 |
| 11 | 服部良一 | 芸能 (作曲家) | 平成5年(1993)2月26日 |
| 12 | 田所康雄 (渥美清) | 芸能 (俳優) | 平成8年(1996)9月3日 |
| 13 | 吉田正 | 芸能 (作曲家) | 平成10年(1998)7月7日 |
| 14 | 黒沢明 | 芸能 (映画監督) | 平成10年(1998)10月1日 |
| 15 | 高橋尚子 | スポーツ選手 (マラソン) | 平成12年(2000)10月30日 |
| 16 | 遠藤実 | 芸能 (作曲家) | 平成22年(2009)1月23日 |
| 17 | 森光子 | 芸能 (女優) | 平成22年(2009)7月1日 |
| 18 | 森繁久彌 | 芸能 (俳優) | 平成22年(2009)12月22日 |

※1 図は筆者が朝日新聞と毎日新聞をもとに作成

『朝日新聞』1977年9月5日、1978年8月5日、1984年4月19日、1984年10月9日
1987年6月23日、1989年7月6日、1989年9月29日、1992年5月28日
1992年7月29日、1993年2月26日、1996年9月3日、1998年7月7日
1998年10月2日、2000年10月31日、2009年1月24日、2009年7月2日
2009年12月23日

『毎日新聞』2009年1月24日、2009年12月23日

※2 ()の中に書かれている名前は芸名、しこ名

※3 古賀政男、長谷川一夫、植村直己、加藤和枝(美空ひばり)、長谷川町子、
服部良一、田所康雄(渥美清)、吉田正、黒沢明、遠藤実、森繁久彌の11人は死後に受賞

第Ⅱ部：ナショナルヒーローの誕生

2-1. スポーツヒーローの表象とナショナルヒーローの要件の関係

繰り返しになるが本研究の中で、これまでに国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手5人をナショナルスポーツヒーローとして定める。これから彼ら5人の表象を追っていく。彼ら5人の表象と、その時代における国民の模範像とも言えるナショナルヒーローの要件は、密接に関係していることが分かる。何故ならばメディアは国民の期待に応えた、スポーツヒーローの表象をするからだ。つまりナショナルスポーツヒーローの表象から、ナショナルヒーローの要件を見出すことが出来る。

これから具体的に見ていくが、昭和のナショナルスポーツヒーローの表象のされ方は大きく四つに分けられる。その表象のされ方とは、「記録」、「努力」、「人格」、「関係」だ。この四通りに表象される背景として、国民が“抜群の実力”を持っていて、“理想とする努力”をしており、“期待する人間像”であり、同時に“理想とする人間関係”を持っている人物こそナショナルヒーローとしてふさわしいと考えていることが挙げられる。

またこれらの要件と表象の仕方を確立したのは、初めて国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手、つまり王貞治と考えられる。上述の通り、この賞は王貞治の名誉を称えるために始まった側面が強いからだ。スポーツ以外の分野も表彰が出来る賞ではあるが、スポーツ選手の場合、年代が近ければどのような選手がこれから受賞出来るかある程度流れを作ったと言える。ではこれから王貞治が実際に、メディアにどのように表象されたのかを見ていきたい。その際に先ほど挙げたナショナルスポーツヒーローの表象に見られる特徴と、ナショナルヒーローの要件の関係から分かる四つの視点から、国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手を分析する。四つの視点をより詳しく説明すると、以下のものになる。

a. 記録

ナショナルヒーローは圧倒的な実力を持っていなければならない。そのために実力の証明となるような、誰にも真似できない「記録」¹¹をスポーツヒーローは持つ必要がある。王貞治であれば、「ホームラン756号の世界新記録樹立」。スポーツ選手で2人目の国民栄誉賞受賞者の柔道家、山下泰裕は「ロサンゼルス五輪柔道無差別優勝、全日本選手権9連覇、世界選手権3連覇」などのようなものが例として挙げられる。その人以外誰も出来ないような「記録」を残し、その「記録」が抜群の実力の証拠としてメディアに語られる。

b. 努力

記録達成までのあらゆる困難に立ち向かう姿勢を、総称しここでは「努力」と呼ぶ。あらゆる困難とは、例えば差別、重圧、ケガ、死などを指す。これら困難に苦しみながらも、練習などで最終的にその困難を乗り越え、最終的に偉業を達成するという物語がスポーツヒーローの表象に使われる。つまり大きな壁にぶつかってもそれを「努力」で乗り越える

¹¹ 本研究では記録については、国民栄誉賞受賞時の記録とする。

というのが、国民のあるべき「努力」の姿でもあったのだ。

c. 人格

スポーツヒーローは決して驕ることのない、謙虚で社会的な人格者としてメディアによって描かれる。このような人間像が国民の模範像となるからである。実際に人格者であるか、そうでないかは表象からだけでは判断は難しい。

d. 関係

本研究では血縁関係、妻、故郷を総称して「関係」と呼ぶ。スポーツヒーローの表象にはこの「関係」について、触れられている。例えば「彼の活躍の裏には、妻の内助の功があった。」や、「故郷の豊かな環境が、才能に磨きをかけた。」などの表現が例として挙げられる。この「関係」の表象もナショナルヒーローの要件と相互に絡み合っている。家族や故郷を大切にするというのが、この時代の国民が理想とする人間関係像であったのだ。

2-2. 王貞治というヒーロー

では上に挙げた四つの要素を含んだナショナルスポーツヒーローの表象は、王貞治の場合、どのようになされているかこれから具体的に見ていく。

a. 記録

王貞治は1977年9月3日に756号のホームランを打ち世界新記録を樹立した¹²。当時ホームラン世界記録はハンク・アーロンのもつ755号であった。このホームラン世界新記録達成が評価され、同年9月5日に国民栄誉賞を受賞した。世界新記録は、国民の憧れとも言える卓越した能力を、示すのに十分であった。

b. 努力

王貞治は、「努力」の王として語られることが多い。ONで有名だが、それは同時代に王貞治とプレーした長嶋茂雄の対立項として一緒に描写される。長嶋は華麗なプレーで観客を魅了したことから、「天才」長嶋と呼ばれた。「努力」の王と「天才」長嶋と違ったタイプの二人が巨人の勝利に貢献するという物語が、彼らがプレーしていた時代の人々を魅了した。

この分かりやすい二項対立から、王貞治が「努力」の男として表象されていたことは分かる。ただ「努力」の王として描写される理由はいくつかの要因が挙げられる。その一つに国籍が関係する。王貞治は、日本国籍でないことに悩まされてきた。その悩みを自伝の

¹² 王貞治はそれから1980年に引退するまでに868本のホームランを打ち、この記録は2010年12月現在も世界記録として残っている。

中でこう語っている¹³。

早実が国体へ出場することは早くから決まっていた。そして、誰もが優勝を目指して猛練習していた。しかし、私だけは国籍が「中国」であったため、出場が認められなかったのである。

[中略] プロ野球公式戦で静岡の草薙球場へ行くたびに、あのころのことを私は思います。ベンチ横の金網に額をこすりつけて、じっと見ていたあの国体の試合。入場行進はしたけれど、試合には出られなかった高校二年生の私……………。

しかし、あれはもう遠い昔のことだ。

今の私は、あれが、ある程度分別のつきかけていた高校生の時で、まだよかったと思う。もし中学生だったら、私の受けた傷はもっと深かっただろう。国籍には関係ない実力だけの世界、プロ野球というものを私が意識しはじめたのも、あの時からだ。

王貞治は、幼き頃から国籍にずっと悩まされてきた。この問題はプロに入ってからでも付いてまわった。プロに入ってから、王貞治の国籍について知らない若手の記者が、選挙の日に「王さんは誰に投票したんですか。」と聞き、部屋が一瞬にして重苦しい空気になったと同じ自伝の中で語っている¹⁴。国籍が表象される背景として、国籍の差別などに“耐える”ような「努力」が、日本国民の最大公約数とも言える理想の「努力」の姿であったからだろう。

c. 人格

王貞治は、謙虚な人物として描かれている。国民栄誉賞を受賞した際の感想を以下のよう述べている¹⁵。

あれは、昭和五十二年の九月、私が第一回国民栄誉賞を貰ったときのことである。

この年は、夏の初めから休みなくホームランが出て、新記録となる「七五六号」が近づくにつれ、私はますます猛り狂った。この年の私は、傍目には多分、昭和四十八年、三冠王を取ったときと同じような勢いに見えただろう。しかし、私自身は、ファンの声援にあと押しされて打たせてもらっているという感じで、バッティングそのものは、決してひとから誉められるようなものではなかった。七五六号が打てたのも、ファンの皆さんがかついてくれた神輿の上で、必死になって暴れた結果のようなものであった。しかも、私は日本人ではない。

だから私は、この七五六号が出た二日後の九月五日、福田総理大臣から第一回国民栄誉

¹³ 王貞治『回想』（日本図書センター、1980）P.217～219

¹⁴ 王貞治は日本国籍を持っていないために、日本での選挙権を有していない。（同書、P.126～127）

¹⁵ 王貞治『回想』（日本図書センター、1980）P.127,128

賞をいただいたときは、これは私個人が貰ったものではなく、野球界全体が貰ったものと解釈した。総理大臣から大冠鷲の剥製と表彰状をいただいたときも、野球界を代表して貰ったのだと思った。

思い起こすと、今でもあのホームランの感激が甦ってくる。国籍という垣根を取り除いてくれたのも、ファンの大声援のおかげだったと思っている。

また実際に 756 号ホームランを打った試合後のインタビューでは、このように答えている¹⁶。新記録を樹立した試合は、巨人対ヤクルト戦であった。ヤクルト鈴木投手は、王貞治にホームランを打たれたことはそれまでになかった。

一打たれた鈴木投手に何かひとことを。

彼には申し訳ない気持ちです。めぐり合わせで初本塁打が 756 号になり、質問攻めにあったりしたでしょうから一。

喜びの感情を全面に表現するのではなく、このような偉業を成し遂げた時でも、相手を気遣える人物としての王貞治が浮かび上がってくる。このような「人格」に関しての表象がされるのは、出来事に対し一喜一憂するのではなく、常に謙虚な人物こそ国民の模範像であったからだろう。

d. 関係

王貞治は両親との「関係」がよく描かれる。王貞治がラーメン屋の息子として育ったというのは、有名な話だ。特に彼の父親である王仕福が、中国国籍である息子貞治が小さな時から、「差別を受けないように皆に優しくしなければいけない」と諭している。母親も少年時代から王貞治を温かい目でいつも見守っている。「人格」的に優れた両親の間に育てられ、王貞治も「人格」者となったという物語は多い。王貞治が 756 号のホームランを打った試合後に行われたセレモニーでの印象的な出来事を、以下のように語っている¹⁷。

しかし、あの七五六号の快感は特別のものだった。私の野球人生の中で、あれほどの快感を味わわせてくれたホームランは他にない。

ベンチへ戻ってくると、関係者がこう提案した。

「セレモニーのとき、ご両親をグラウンドへお呼びしたらどうでしょう」

いつもの私なら辞退したところだ。このホームランは私の力だけで打ったのではない、ファンやチームメートの声援があったからこそ打てたのだ。しかも、私は晴れがましいことは好きではない。

¹⁶ 『朝日新聞』 1977 年 9 月 4 日

¹⁷ 王貞治『回想』（日本図書センター、1980）P.244

しかし、このときの私は七五六号の快感に酔っていたのかも知れない。同じグラウンドに両親と一緒に立って喜びを分かち合いたい。今日だけは両親とともに、ファンの方々の祝福に身をゆだねることを許していただきたい、と思った。

私は頷いた。そして、この日は、私たち親子にとっても最高の日となった。

セレモニーは予定通り進んだ。そして、最後に思いがけないハプニングが起こった。

私を迎えてくれるために、ベンチの前へ横に一列に並んだ仲間たちに、父と母は、

「ありがとう」

「ありがとうございました」

といって頭を下げ、一人一人と握手していった。

私には思いもつかないセレモニーの幕切れであった。おそらく誰も私の父と母があんなことをするとは思っていなかったろう。嬉しかった。そんな両親をつくづく誇りに感じたものだった。

王貞治という人物を語る時、両親の存在は常にセットで語られる。また両親ほどではないが王貞治の家庭も、この記録達成の前後で描かれている。ハンク・アーロンの記録に並び世界記録タイになった時、王貞治の妻である恭子夫人は自宅に娘たちといた。娘たちはホームランを打った時、跳び上がって喜んだ。また同家には祝福の電話が鳴りやまず、恭子夫人は涙ながらに対応したことが描かれている¹⁸。

このように表象された両親と妻との良き「関係」は、国民の望む理想的な個人の間関係像が反映された結果とも言える。ナショナルヒーローや国民のあるべき姿と言ったものが、ナショナルスポーツヒーローの表象を通して、国民に伝わっていく。

先ほども見たように、この王貞治がホームラン世界記録を作り国民栄誉賞を受賞するまで、同時代の現役選手を表彰する制度がなかった。つまりナショナルスポーツヒーローを生み出す仕組みが日本にはなかった。それが国民栄誉賞という形でこの年の1977年から、メディアを介し、創られるようになる。そのナショナルスポーツヒーローの第1号が、王貞治であったのだ。彼の表象は、メディアによって「記録」、「努力」、「人格」、「関係」という四つの視点から行われた。表象の四つの形体を掘り下げると、その先に“圧倒的な実力”を持ち、“血のにじむような努力”をして、“偉業を達成しているが謙虚”であり、“家族”に恵まれている人物こそ模範的人物であるという国民の集合意識のようなものが想起される。要するにナショナルスポーツヒーローの表象が、国民の模範像の要件に通じていると考えられる。表象を通して、初めてナショナルヒーローの要件も明らかになってきた。

したがって王貞治が国民栄誉賞受賞者第1号であったため、ナショナルヒーロー像をも彼が確立したと言える。

¹⁸ 『朝日新聞』1977年9月1日

第Ⅲ部：継承されるナショナルヒーロー像

3-1. 受け継がれるナショナルヒーロー像

王貞治が原型を創ったと言えるナショナルヒーロー像は、1980年代に国民栄誉賞を受賞する3人のスポーツ選手にも当てはまる。つまりこれらの3人は、王貞治と極めて近いメディアの表象をされることになる。それではこれから山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士の3人の表象とナショナルヒーロー像の関係を分析したい。

3-1-1. 山下泰裕というヒーロー

a. 記録

山下泰裕は1984年8月12日にロサンゼルスオリンピック柔道無差別級で優勝した。その他にも国民栄誉賞受賞した年である1984年までに全日本選手権8連覇、世界選手権3連覇、昭和52年以来、198連勝という「記録」¹⁹を残している。この「記録」は、山下泰裕以外誰にも真似が出来ないという印象を与えるには十分であろう。

b. 努力

山下泰裕の「努力」のストーリーは大きく二つの側面から語られる。

一つは悲願達成という「努力」だ。山下はロサンゼルス五輪の金メダルは「8年越しの悲願達成」という形で語られる。

1980年5月24日に日本オリンピック委員会は、モスクワ五輪の不参加を決定した。当時現役バリバリであった山下泰裕のオリンピック出場は、この日に断たれた。また翌日の25日に全日本選抜体重選手権が行われた。この大会は本来であれば、モスクワ五輪の代表選考会を兼ねていた。この大会で山下泰裕は左足のひ骨を骨折するという大ケガに見舞われる。このケガしてからの日のことを、山下泰裕は以下のように語っている²⁰。

それから2年間、私は「オリンピック」という言葉を考えないようにしました。封印しました。

オリンピックへの出場権は、ただ待っていれば得られるわけじゃない。厳しい練習を積み重ねて、最後に選ばれた人間だけが出場できる。

「次、頑張ってくださいね」と言われると非常につらかった。だから自分を守る方法として、自分が傷つかないようにするために、オリンピックのことは考えないようにしたのです。

¹⁹ 山下泰裕は最終的に全日本選手権9連覇、連勝記録203まで記録を伸ばし現役引退をした。
「山下泰裕公式サイト」

<http://www.yamashitayasuhiro.com/history/>

²⁰ 山下泰裕『指導者の器』（日経BP社、2009）P.47

自分の大事な人や肉親が亡くなったときに、「大変だったですね」と言われると、つい考えてしまうでしょう。考えると、やっぱりつらくなります。当時の私は、それと同じ状況でした。

ですから、モスクワ五輪のことを取材したいと言われたときには、私はこうお願いしました。「あなたは、私の大切な人の死を思い出させて、それを語らせるような質問をしているんですよ。その覚悟で聞いてください」と。

二つ目は、ケガに耐えたという「努力」だ。山下泰裕はロサンゼルス五輪の二回戦で右足ふくらはぎを痛めた。だが棄権せず、痛めた右足を引きずりながら試合に出て勝ち続け、結果金メダルを獲る。

モスクワ五輪に出場出来ず8年越しのオリンピックで、ケガにも負けず山下泰裕は金メダルを獲る。このような山あり谷ありのような物語とも言える表象は、数々の困難をくぐり抜けないと偉業は達成出来ないという国民の心性のようなものの表れとも言える。

c. 人格

王貞治同様に、山下泰裕も謙虚な人物として映し出される。国民栄誉賞が内定した時の山下泰裕の話では以下のように語っている²¹。

一山下だけでなく、アマチュアスポーツ界全体が評価されたものと思う。自分は平凡な人間ですが……。こういう賞をもらったからには、現役を終えた後も指導者、社会人として立派に世界に通用する人間になるよう努力したい。

現役を終えた後も指導者、社会人として立派な人間になりたいと発言しているところに注目したい。謙虚だけでなく、現状に満足することなく常に高い目標へ挑む姿勢が発言から読み取れる。謙虚であり、チャレンジャーであることが「人格」の意味をよく表しているのかもしれない。

d. 関係

山下泰裕が語られる時、よく出てくる登場人物が祖父母だ。彼らが、仕事で忙しい母に代わって、山下泰裕の育児を引き受けた。スポーツ雑誌である『Number』には、その様子が以下のように書かれている²²。

そして、これはもう有名な話だが、祖父泰蔵さんが幼い孫に、新鮮な鯛の刺身や、フグの骨を砕いて煮込んだスープなどを離乳食に与え、今日のしなやかな巨体の土台をつくっ

²¹ 『朝日新聞』1984年9月29日

²² 『Number』106号、1984年8月20日号

たのである。

初めに有名と書いているように、この祖父は山下泰裕がロサンゼルス五輪の金メダルを獲った後、山下泰裕を小さな時から支えてきた男として紹介される。

また山下泰裕が国民栄誉賞を受賞した日に、祖父泰蔵はこの世を去った。国民栄誉賞受賞のニュースの後に、祖父泰蔵死去の報道も同時にされている²³。山下泰裕という英雄には、祖父という頼もしい味方がいるという「関係」が、メディアによって語られる。

今の時代ではなかなか見られない表現だ。何故ならば日本のスポーツ選手も海外に活躍の場を移し、一流選手の強さの秘密は海外での経験やコーチなどから語られることが多い。逆にこの山下泰裕の場合、田舎や家族である祖父が強さの秘密として語られる。理由はこちらの表象の方が読者である国民の心をより捉えたからだ。家族や故郷を大切にするという潜在的な期待に、メディアは表象という形で応えている。

3-1-2. 衣笠祥雄というヒーロー

a. 記録

衣笠祥雄は、当時の世界記録であった連続試合出場記録 2130 試合を更新し、連続試合出場記録を 2131 試合として世界新記録²⁴を樹立した。好不調関係なく試合に出続けるその姿から、ファンから衣笠祥雄は「鉄人」と呼ばれている。日本の中の偉大な実力者なのである。

b. 努力

衣笠祥雄の場合、記録が連続試合出場記録という「記録」達成したために、スランプと慢性的なケガに悩まされ続けてきた。17年間かけてこの「記録」を作ったために、これらスランプとケガの二つと戦うことが彼の「努力」であった。連続試合出場が 2000 試合と大台に乗る直前に衣笠祥雄は、このように考えていた²⁵。

私は真剣に悩んだ。具体的に一九九九試合で辞めるには、どうすれば一番いいのか考えた。しかし、やめるのは簡単とよく言うが、この時だってやめるのは簡単だったに違いない。私がたった一言「もう出ない」と言えば、記録は途切れるし、誰も記録のことで気をもまなくて済んだはずである。

[中略]

大ケガをした時に、私のために涙してくれたトレーナーもいた。打撃不振で悩んだ時に、声をかけてくれたチームメイトやコーチの方々もあった。私が倒れずに出場しつづけてい

²³ 『朝日新聞』1984年10月9日

²⁴ 現在はリプケンの2632試合連続試合出場記録が、世界記録である。

²⁵ 衣笠祥雄『水は岩をも砕く』（KKロングセラーズ、2008）P.155

ることを喜んでくださっているファンの声も間違いなく大切なものなのだ。

だから、連続試合出場の記録は、私が自分の手で止めていいものではない。そうだとしか考えられなかった。

スランプとケガに苦しみ、満足のいく打撃の結果が、世界記録達成を目の前に衣笠祥雄は出せなかった。「試合に出るな。記録だけのために出ているのか。」というファンからの野次も飛んだ。引退すべきか、現役を続けるべきかの葛藤の中にいた。

連続試合出場と「継続は力なり」という言葉を体現した衣笠祥雄は、国民の「努力」の規範像となったとも解釈が出来る。

c. 人格

衣笠祥雄は国民栄誉賞の内定が決まった時、王貞治と山下泰裕と似たコメントを以下のように残している²⁶。

野球ばかりしていたので、こういう大きな賞をいただけるとは思わなかった。驚いているというのが実感です。賞の重みが大きすぎるので、これから、賞に値する人間にならなければならないなと思っています。二十二日の受賞式では首相に失礼のないよう言葉を考えておきます。もう少し野球がうまくなれるだろうという自分の可能性を追い求める気持ちを持ち続けているうちは、プレーし続けたいと思っている。ありがとうございます。

実際、国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手が謙虚な人格者なのか本当のところは分からない。ただ衣笠祥雄のような談話は決まった形でメディアによって、繰り返し語られるのだ。謙虚でありチャレンジスピリットに溢れる表象は、山下泰裕同様の「人格」の表象の仕方だ。

d. 関係

妻の正子夫人の内助の功が、衣笠祥雄の「関係」では多く語られる。正子夫人を伴い国民栄誉賞受賞式にも参加している様子が、伝えられている²⁷。また衣笠祥雄は、衣笠に対して一番強い影響を与えられたのは妻であり、妻がいなければまったく違った野球選手になっていたと語っている²⁸。つまり妻の支えが自分の大記録につながったという表象がされていることが分かる。

このように妻、家族を大切にする時代の理想的な人間関係を体現したナショナルヒーローの衣笠祥雄が、「関係」の表象から見えてくる。

²⁶ 『毎日新聞』1987年6月19日

²⁷ 『毎日新聞』1987年6月23日

²⁸ 衣笠祥雄『水は岩をも砕く』（KKロングセラーズ、2008）P.180

3-1-3. 千代の富士というヒーロー

a. 記録

千代の富士は1989年9月秋場所にて、大潮の持つ通算勝ち星最高記録964勝を更新した。2010年12月現在、千代の富士が持つ1045勝は通算勝ち星最高記録となっている。また千代の富士は昭和に活躍し、平成の初めに引退した。そのために昭和という時代を強く印象づけた横綱であった。

b. 努力

千代の富士は度重なる脱臼によるケガ、愛娘の死との戦いという「努力」がメディアによって語られる。

まずケガに対する「努力」について説明したい。千代の富士は両肩の脱臼経験がある。特に左肩は何度も脱臼している。当然相撲という競技において、肩のケガは選手生命を左右しかねない。この脱臼は英雄の物語の困難としての役割を果たす。脱臼の再発防止のために、千代の富士は毎日筋力トレーニングを行った。昭和の「努力」の理想像が影響を及ぼしていると見える、千代の富士の「努力」の表象を以下に紹介する²⁹。

かかりつけにしていた意思の先生によると、私の肩は関節のかみ合う部分が浅く、外れやすいということだった。手術すれば完治するが、それではどうしても腕の動きが悪くなるというのだ。

筋肉質の体だったから、肩のまわりに丈夫な筋肉の鎧をつけるのがいちばんいいだろう、ということになった。

鉄アレイ、ダンベル、バーベルなど器具を使った筋力トレーニングを取り入れ、丈夫な筋肉をつける努力をしたが、キチッと腕を曲げて胸を下までおろす腕立て伏せが、いちばん効果があったように思う。

50回やっては休み、一日500回をノルマとした。

「これをやり抜けば、肩は外れなくなる」

そう信じるしかなかった。そう信じなければ続かなかっただろう。

この表象から注目すべき点は、肩のまわりに筋肉をつけるのが良いという医師の助言以外、科学的根拠がないということだ。信じる以外、練習を続ける理由を見いだせない。悪い言い方をすれば、やみくもとも取れるような練習であり「努力」の表象だった。

次に家族の「関係」と重複する点もあるが、愛娘の死を乗り越えるという「努力」について触れる。平成元年7月の名古屋場所直前に、千代の富士の三女である秋本愛が乳幼児

²⁹ 九重貢『綱の力』（ベースボールマガジン社、2011）P.48
九重貢は千代の富士と同一人物。

性突然死症候群のため急死した。生まれてまだ1年も経っていなかった。精神的なショックを受けるも、家族を元気づけるために、千代の富士は休まず土俵に上がり続けこの名古屋場所を優勝で飾る。さらに付け加えると、北勝海との同部屋横綱の優勝決定戦を制してのことだった。その時の心境を千代の富士は、以下のように書いている³⁰。

どん底からはい上がり、なんとか優勝決定戦までこぎつけたのに、相手が弟弟子では力が入らない。

ここまでなんとか頑張ってきたのに、最後の最後で兄弟弟子同士の対戦。そこまでつらい思いをさせたいのか、と神様を恨むような思いも浮かんだ。

しかし、逃げることはできないし、やらなければいけない。家族の思いを抱えてここまでやってきたのだから・・・・・・・・。

[中略]

最後の最後に「兄弟弟子対決」になるなど、いろいろなことがありすぎた場所だったが、最終的に家族で勝ち取った供養の優勝だった。

愛とは短い間しかいっしょにいられなかったが、悲しみのなかで得るものは大きかった。精神面でもたくましくなった。家族の絆がこれでさらに深まったと感じた。

家族との「関係」が死を乗り越える「努力」と相互に絡み合い、ここでは表象が行われている。

このように度重なる脱臼のケガと愛娘の死を乗り越え強くなる千代の富士の「努力」の表象は、逆境を跳ね返す人物こそナショナルヒーローという人々の思いを汲んでいた。

c. 人格

千代の富士の場合も、国民栄誉賞を受賞した時のコメントを見てみる。記者会見で千代の富士はこう言った³¹。

「たいへん思い賞をいただき、それに答えるようにより一層がんばります。1000勝もだいたい近づいてきたので、次はこれを目標にして行きます。」

謙虚であり、チャレンジングな人物という表象がなされている。また横綱という地位は、周知の通り、相撲の強さだけでなく人格的に優れた人物であることが求められる。つまり横綱は、土俵の外でも注目を浴びる人物なのだ。千代の富士は横綱であった時に土俵の上だけでなく、生活面でも、自分を戒めることが出来たからその地位を守れたと後に振り返

³⁰ 九重貢『綱の力』（ベースボールマガジン社、2011）P.60,61

³¹ 千代の富士貢 向坂松彦『私はかく闘った 横綱千代の富士』（日本放送出版協会、1991）P.204

っている³²。

d. 関係

千代の富士の田舎は、北海道松前郡福島町塩釜に生まれた。千代の富士の強さの秘密、歴史が語られる時、この町の存在なくしてそれは出来ない。

この町と千代の富士の「関係」は大きく二つある。

一つは強さだ。千代の富士の田舎は大自然に囲まれている。特に海に囲まれた町であり、かつ父親が漁師であるために千代の富士は海で育った。この海と千代の富士の幼少期の逸話を紹介している記事を見てみたい³³。

— 相撲からちょっと離れて、本名の秋本貢さんにお聞きしたいんですが、北海道時代、家業の手伝いもしたとか。

千代の富士 田舎のほうの生活ぶりというのは、とにかく学生であっても、勉強とともに、家の手伝いも大きな仕事のひとつなんです。だからそういう意味で、親の手伝いというのは、しょっちゅう、当たり前のようにやったね。

— 父上・秋本松夫氏の話だと、「あの大横綱の双葉山も少年の頃、舟に乗って足腰やバランスをとる訓練をした。うちの貢も……」と。

千代の富士 はっはっはっ。自然のうちにそういうふうになったんでしょう。今思えば、運動神経、反射神経、そういうものが遊びのうちに身についたのかなあと……。

父親の漁師の仕事の手伝いや、北海道の大自然の中で遊び、冬の厳しい寒さなどによって、運動神経や精神面が鍛えられたという記述は他にも多い。

二つ目は縁だ。千代の富士が角界に入ったきっかけは、同郷の千代の山の存在がある。千代の富士が中学3年生の時に、スカウトが彼に相撲を薦めた。千代の富士は当時全く相撲に興味がなく、断った。しかし半年もしないうちに大相撲の巡業が福島町で行われた。その時に同郷の千代の山が、千代の富士を熱烈に勧誘した。相撲より飛行機に千代の富士は惹かれ、東京に相撲をしに行ったのが、相撲を始めたきっかけだったという話は有名となっている³⁴。

上述に加えた愛娘の存在に加え、千代の富士の運動神経を磨き、相撲を始めるきっかけとなり強さの秘密の場所として語られる田舎の「関係」が、千代の富士の表象の特徴だ。

3-2. 昭和のナショナルヒーロー像

第I部から今まで見てきたように、日本におけるスポーツヒーローは「記録」、「努力」、

³² 九重貢『綱の力』（ベースボールマガジン社、2011）P.10

³³ 『Number』271号、1991年7月5日

³⁴ 千代の富士貢 向坂松彦『私はかく闘った 横綱千代の富士』（日本放送出版協会、1991）P.55～58

「人格」、「関係」の四つの面から表象されていることが分かる。またこの表象の背景に、ナショナルヒーローの要件が絡んでいる。その要件とは、“抜群の実力”を持っていて、“理想とする努力”をしており、“期待する人間像”であり、同時に“理想とする人間関係”を持っていることだ。これらの順に「記録」、「努力」、「人格」、「関係」の表象は対応する。

上に挙げた表象の方法をもって、メディアを介して国民の前に初めて登場したのが王貞治であった。何故ならば国民栄誉賞が、王貞治を表彰するために作られたからだ。初の表象と同時にナショナルヒーロー像、つまり国家の英雄の要件を王貞治は確立した。

その王貞治によって確立されたナショナルヒーロー像を、彼の国民栄誉賞受賞から7年後経ったスポーツ選手2人目の受賞者、山下泰裕も受け継いだ。1987年の国民栄誉賞受賞者である衣笠祥雄、1989年受賞の昭和最後の名横綱の千代の富士も同様に、この流れを引き継いだ。要するに王貞治、山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士の4人のナショナルヒーロー像は同じであった。

第IV部：受け継がれなくなったナショナルヒーロー像

第III部で王貞治、山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士のナショナルヒーロー像が共通であることが分かった。しかし次に国民栄誉賞を受賞する高橋尚子は、この4人のナショナルヒーロー像が当てはまらなくなった人物であると言える。彼女の表象の検証からこれから探って行く。結論を先に言えば、「努力」と「関係」の表象が変わった。

4-1. 高橋尚子から見る、変容するナショナルヒーロー像

a. 記録

高橋尚子は、2000年に行われたシドニーオリンピックで女子フルマラソン金メダルを獲得した。女子陸上界初の金メダルとなった。圧倒的な実力というナショナルヒーローの要件は、2000年になっても変わらない。

b. 努力

もちろん高橋尚子においても、これまで見てきたような「努力」の表象は見られる。五輪選考会前のケガ、トレーニングなど辛い経験を乗り越えてきた。

しかし、今までの4人とこの「努力」における表象は高橋尚子の場合明らかに違う傾向が二つある。

一つは「努力」に見られる辛さや苦しさ以上に、楽しさや笑顔などの言葉が彼女の表象に多く用いられる点だ。シドニー五輪前から高橋尚子取材してきた黒井克行は、著書『高橋尚子 勝利への疾走』でオリンピック前に高橋尚子はこのような発言をしていたと書いている³⁵。

「トップでスタジアムに入ってくれば、一番大きな歓声が自分だけに与えられる。私はそれを味わいたいんです」

オリンピック代表に選ばれて以来、高橋はずっとそう言い続けてきた。

日本国中が高橋に対して金メダルへ絶大の期待を寄せているというのに、彼女は『金メダル』を口にするのはほとんどなかった。むしろ、それを代弁する形で公言していたのが、

「スタジアムの大歓声を楽しみたい」

また高橋尚子が金メダルを獲った日の外国人記者向けの記者会見では、このようなインタビューがある³⁶。

—なぜそんなに強いのか。

³⁵ 黒井克行『高橋尚子 勝利への疾走』（講談社+α文庫、2006）P.42

³⁶ 『Number』507号、2000年10月5日

「練習です。何キロ走ったとは言えませんが、とにかく練習がものすごくきつかった。口で説明できません。練習を思えば、今日の42kmはとても楽でした」

[中略]

—今、何をしたいですか。

「おいしいものをたくさん食べたい」

外国プレスも爆笑する。

ドーピング検査に促されたとき、高橋は通訳に「付け加えていいですか」と言った。

「応援が42km、切れないでいたからこそ、どんなに苦しくても走り切れました。英語ができなくて上手く言えませんが、シドニーのみなさんに心からお礼を言いたいです」

外国人記者たちも彼女の輝く笑顔と、凄まじいばかりの迫力を持った走りに、いや、そのギャップの虜になったようだった。

今まで国民栄誉賞を受賞してきた4人の表象とは、高橋尚子の場合、内容が違うことが分かるだろう。今まで見てきた4人は「努力」は、辛いものや困難なものとして描かれてきた。しかし高橋尚子の場合「努力」の表象はポジティブなものに変わっている。

また高橋尚子の「努力」の表象で、触れておかなければならない変化がもう一つある。それは科学的な「努力」を高橋尚子がしているという表象だ。

高橋尚子はシドニーオリンピックの前に、アメリカのボルダーという土地で練習を行っていた。ボルダーは高地にあるため、マラソンに必要な肺活量を鍛える練習を行うのに優れた土地であった。その優れた環境で、何度もシドニーで実際に走るアップダウンの激しいコースのシミュレーションを行っていたことが、先ほど引用した黒井の作品の中で語られている³⁷。

実際のシドニーオリンピックの勝因を、戦略と技術という点から分析して以下のように書いている記事もある³⁸。

「ポップ・ラン」—と翌日、地元紙が表現していたが、まるでポップミュージックに乗ったかのようなリズムカルな「走り」には実際のところ多くの秘密が隠されている。

強豪を含んだ22人の集団を引きちぎって、されにもう一度スパートをかける。レースにおいてももっとも過酷な35kmからを含めた勝負を数回にわたって仕掛ける「展開」も、今までの女子にはないテクニックのひとつである。

最後に高橋だけが持っている独特の「距離感」もまた、圧倒的な正確さと強さをもってレースで表現された。

誰にも真似のできない「超ピッチ走法」ともいえるフォーム、絶妙のスパート、そして「距離感」。これらほかのランナーとはまったく異次元にある武器に、金メダルへの

³⁷ 黒井克行『高橋尚子 勝利への疾走』（講談社+α文庫、2006）P.139

³⁸ 『Number』507号、2000年10月5日

42. 195km のカギが潜んでいる。

練習、本番の様子がより科学的に書かれていることが分かる。昭和に国民栄誉賞を受賞した4人の「努力」の表象は、非合理的とは言えないが、がむしゃらさのイメージを抱えている。例えば、千代の富士の「努力」の表象で触れた筋力トレーニングなどが挙げられる。

「努力」に関してまとめるとすると、昭和の「努力」の表象の特徴であった辛さやがむしゃらさは、2000年の高橋尚子の表象では楽しさや科学的という内容にシフトしてきた。

c. 人格

人格という点においては、王貞治、山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士と高橋尚子は特に変わりは見えない。つまり高橋尚子は謙虚な人物である、という表象だ。高橋尚子は自伝で国民栄誉賞受賞についてこう語っている³⁹。

小出監督はよく、「金メダルのための人生ではなく、人生のための金メダルだ」と教えてくださるが、今回の賞もまさに同じである。

賞をいただいたことは、私にとって最高の到達点ではないし、ひとつの「通過点」にしすぎないと思う。これで私のマラソン人生が終わってしまうわけでもない。

あくまでも、次のステップとして受けとめ、プレッシャーとか重いものを背負うのではなく、誇りをもって、それに恥じないようなレースをすること。驕る気持ちに負けないように、一段上を目指して、いままでどおりにやっていくこと。

それを目標にしたいと思っている。

今まで見てきた4人と同様、向上心が高い人格者として描かれている。特に変わった特徴は見られない。この点において、国民が期待する人間像は時代に左右されていない。

d. 関係

今までの4人で見てきた「関係」は主に、両親や妻といった家族と故郷が中心であった。これらの「関係」と高橋尚子は少し違う描写がされている。具体的に言うと、家族ではなく高橋尚子のコーチであった小出義雄の存在が、高橋尚子の強さに「関係」あるものとして紹介されている。

小出義雄というコーチについて見てみたい。2000年当時、高橋尚子の特集が組まれる時必ずと言っていいほどこのコーチが登場する。高橋尚子と二人三脚でずっと練習をしてきた名コーチとして注目を浴び、その手腕は小出マジックとまで呼ばれた。高橋尚子は自伝

³⁹ 高橋尚子『風になった日』（幻冬舎、2001）P.225,226

の中で小出義雄について語っている文章を引用する⁴⁰。

監督とは、私にとってどんな存在なのか？

インタビューで、そんな質問を受けることがよくある。

そのたびにいろいろと考えてみるのだが、どんな言葉を探しても、あまりうまく当てはまらないのだ。

お父さんのような存在ですか、と言われることもある。

だが、お父さんとは違うような気がする。実際の父にはこんなに何もかも話せないし、三百六十五日、これほど身近にいることもない。監督には漫才のように突っ込むこともあるし、感情的になってひどいことも言ってしまうが、父には、そんなことは言えない。

そう考えたとき、監督という存在は、やはりお父さんでもなければ兄弟でもないし、友達でもなければ恋人でもない。でも、嬉しいとき、楽しいとき、悲しいとき、悔しいときも、ずっと一緒になって感じてもらえる。

そんな、いちばん身近な存在が、私にとっての監督なのだ。

監督のもとで練習をしていると、辛くてきつい練習のときでも、楽しいことをしているような嬉しい気持ちで走ることができる。

たとえ、「今日はなんか嫌だな、走れるかな？」と思うときでも、

「これやったら強くなるぞ。おまえ、すごいな」

と言われると、自分からすすんで、やろうという気になってしまう。

「そうか、これをやったらもう一歩夢に近づくんのだ。やらなくちゃ」

という気持ちになるのだ。

監督との二人三脚があったからこそ、ここまでくることができた。オリンピックに出ることができただけでなく、金メダルという栄誉も手にすることができたのだ。

特筆すべきは、監督が高橋尚子にとってどのような存在かよく聞かれるという点であろう。このことから小出義雄という存在が、高橋尚子とセットにしてメディアに語られることが分かる。またお父さんのような存在ですか、とも聞かれるとあるが、これは今まで見てきた国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手4人と同じ表象が出来るかという質問として捉えることが出来る。だが高橋尚子はこの質問に対し、違うと答えている。どこか家族に近いが、家族ではない新しい「関係」の表象がなされている。

+ α 女性

高橋尚子の表象で見逃していけないのは、彼女が「女性」であるという表象の仕方だ。今までの4人の受賞者はいずれも男性であり、このような表象のされ方はされなかった。

⁴⁰ 高橋尚子『風になった日』(幻冬舎、2001) P.100~102

当時の新聞記事がある⁴¹。

マラソンは、しばしば人生に例えられる。確かに、彼女の手にした金メダルは示唆に富む。数多くの選手がプレッシャーに押しつぶされてきた中で、高橋選手は終始笑顔を絶やさず、のしかかっているはずの重圧を感じさせなかった。

小出義雄監督はいつも彼女にこう話していた。「スポーツは人のためにやるものじゃない。昔は最初からお国のため、お国のためとやったけど、いまは違う。自分のためにやるんだ。おまえが母親になった時、お母さんはこんなに頑張れたんだよ、と子供に自慢できるように。そのために頑張れ」

そう考えることで、周囲の期待を重荷ではなく、推進力に変えることができた。

有森裕子選手も小出監督の指導を受け、バルセロナ五輪で銀メダル、アトランタ五輪で銅メダルを獲得した。彼女の口癖も「喜びを力に」だった。女性のしなやかな強さが引き出されているところに共通点がある。

お母さん、女性のしなやかさなどの言葉が出てくる。同時に興味深いのがこの年に住友生命保険が行った調査で「二十世紀を代表する女性」の1位に高橋尚子が選ばれた⁴²。

国を代表するスポーツ選手だけではなく、日本の象徴的な女性として高橋尚子は表象されていた。つまりナショナルヒロインの役を高橋尚子は担っていた。

4-2. 表象の変容の要因

ここで一回整理したい。図2を見て欲しい。王貞治、山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士の国民栄誉賞受賞者4人は「記録」、「努力」、「人格」、「関係」の4つの条件を全て満たして表象されてきた。しかし、千代の富士が受賞してから11年後に受賞した高橋尚子は表象の内容がそれまでのものとは変わっていた。もちろん変わらない点もある。「記録」、「人格」に関しては高橋尚子の時も変わらないと言える。だが「努力」、「関係」の表象は変わった。「努力」の表象は、困難をやみくもでも練習をして乗り越え栄光をつかむというストーリーではなく、記録達成までのプロセスを楽しみ目標を設定して訓練を行うというものになった。また「関係」の内実も変容していた。千代の富士以前の受賞者は家族、妻、故郷の「関係」が描かれていた。だが高橋尚子の時は、小出義雄というコーチがセットに描かれている。父親のようで、父親ではない、つまり家族のようなものであり、家族ではない新しい「関係」の表象だ。

41 『朝日新聞』2000年9月25日

42 2位はインドの社会奉仕活動家のマザー・テレサ、3位は歌手の美空ひばりであった。
“20世紀を代表する女性”～アンケート～ 住友生命保険相互会社 2000年12月調査
竹内宏 編者『アンケート調査年鑑 2001年版』並木書房,2001

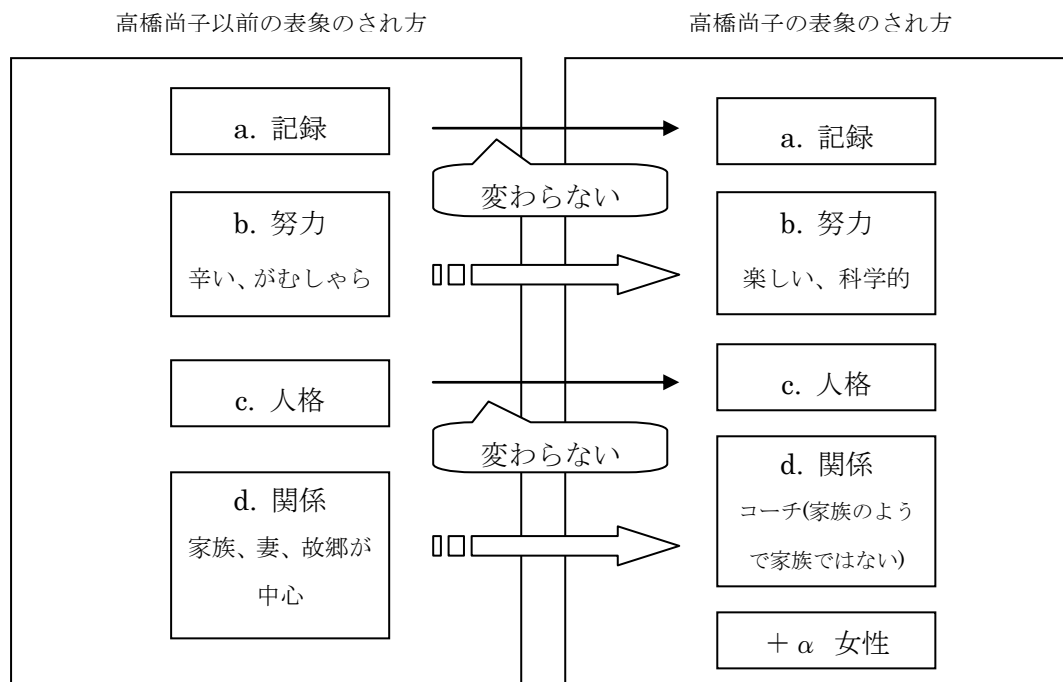


図 2

では表象のされ方が変わったのは何故か。それは千代の富士が 1989 年に国民栄誉賞を受賞してから、11 年経ち高橋尚子が 2000 年に受賞するまでにナショナルヒーローの要件そのものが変わったからだ。より具体的に言えば、国民がヒーローに期待する“理想的な努力”の方法、“理想的な人間関係”の在り方が変わったのだ。

では何故、高橋尚子の表象の仕方とナショナルヒーローの要件が、以前の国民栄誉賞受賞者であるスポーツ選手 4 人と変わったのであろうか。言いかえれば 1989 年から 2000 年の間に日本人の集合意識を変えるような出来事は何であったのか。その要因を筆者は「努力」は経済低成長、「関係」はジェンダーという点であると考えている。

4-2-1. 「努力」の変容～経済低成長の時代～

90 年代初めに起きたバブル崩壊が、それ以前と後の国民の価値観を大きく変えた。

1977 年から 1991 年までの日本の経済成長率は、1980 年と 1986 年に記録した 2.8%という数字が最低であった。この経済成長率が、バブル崩壊を境に頭打ちとなる。1992 年から 1%以下になる。一時 1995 年から 1997 年の間に回復を見せるものの、1998 年にはマイナス成長を記録した⁴³。いわゆる 1991 年以降、失われた 10 年に突入した。

では 1991 年以前は昭和、それ以後は平成と大きく分けることが出来るが、バブル崩壊を

⁴³ 数値は内閣府「国民経済計算」によるもの。
内閣府『平成 22 年度版経済財政白書』（日経印刷株式会社、2009）p.455

境に変わった日本国民の価値観とは何か。筆者は、それは従来の「努力」への懐疑だと考える。

この従来の「努力」への懐疑を、年功序列制度の例から説明する。バブル崩壊後、物が売れなくなり、企業も様々な問題を抱えた。

その中の大きな問題の一つが人事であり、年功序列制度であった。年功序列制度と云えば、年齢に応じて給料や地位が上がる制度である。実際に働く人の視点に立てば、会社で働く数年後の自分の給料や役職が、ある程度計算出来た。つまり若い時に、自分のやりたいことに反する仕事を与えられても、それをこなして会社を辞めさえしなければ、安定した将来を手にすることが出来た。だがこの制度は、順調な経済成長が前提であった。年齢に応じて序列が上がる。したがってその分の役職が必要になる。逆に縮減は許されない。だからこそ年功序列制度を維持するためにも、経済成長が必要だった。

しかし今まで見てきた通り、1991年以降から経済は低成長に入る。結果、多くの国民の仕事と生活を支えてきた年功序列制度が土台から揺らぎ始める。会社で若い時にかむしゃらに働いても、将来高い給料をもらえることが保証出来なくなったのだ。保障出来るどころか、失業者なども増え、将来の不安は一層増した。

ここで重要なのが、この例から分かるように1991年以前、ここでは昭和の理想とも言える「今がつらくても、同じ場所で頑張れば、安定した将来が待っている。」と言った「努力」の像が疑われ始めたのだ。後に経済不況が続く中で、その国民の懐疑はますます強くなっていく。逆に結果を出すための合理的な「努力」が評価される傾向が、日本でも強くなるのは、ある種当然と言えるだろう。

困難をやみくもにでも頑張っ乗り越えて偉業を達成するという物語が、1991年以降、国民の間で共有されなくなっていった。言いかえれば、国民栄誉賞を受賞した王貞治、山下泰裕、衣笠祥雄、千代の富士の「努力」の表象が国民に通じなくなっていった。

今まで見てきた通り1991年以降は、従来の「努力」の理想が疑われ始めた時代であった。だからこそ、従来の理想の「努力」に代わる新しい「努力」の表象が必要であった。そのような時代に現れたヒーローが高橋尚子であった。偉業達成までのプロセスを楽しみ、かつ科学的な「努力」の表象を高橋尚子は行われる。これは昭和に見られた「努力」の理想が代わり、国民が新しい「努力」の理想を求めた結果ゆえの表象であろう。したがってこの「努力」に関する表象とナショナルヒーローの要件の中身の変容は、1991年のバブル崩壊からの経済低成長に原因をたどれる。

4-2-2. 「関係」の変容～ジェンダーからの考察～

高橋尚子が語られる時、何故小出義雄が共に語られるのであろうか。それは前項の表象 + α で述べた「女性」という点が大きく関係している。結論としてはジェンダーが、高橋尚子の表象の背景にある。

ジェンダーという概念は社会的な性という意味であるが、その多くが性役割分業の固定

化の批判の文脈において使われる。今でこそ聞かれなくなったが、「男は仕事、女は家庭や育児」という表現がその典型的な例であろう。日本では1985年に男女雇用機会均等法を批准し、1999年に男女共同雇用機会均等法が制定された。つまり20世紀末の日本では、男女の分業の在り方や構造そのものが問われ始めた時期であったと言える。そのような時代の流れを、日本のスポーツは影響を受けていた。

2000年シドニーオリンピックは日本のジェンダーを象徴するような大会であった。本研究で取り上げている高橋尚子や柔道の谷亮子(旧性、田村)を中心に、女性の活躍が注目された。スポーツは男性のものという見方が強い中で、このオリンピックは女性にとって転換点となる出来事であった。逆に言えば、男性がヘゲモニーを持つ日本スポーツにおいて、シドニーオリンピックでは、それを男性は失いかねない危機的状況に追い込まれた。しかし男性はメディアの力を使い、ヘゲモニーの力の保持に成功する。そのメディアが取った戦略こそ、高橋尚子と小出義雄というコーチをセットにして語ることであった。

「高橋尚子の金メダルは小出義雄という男性のコーチングの功績が大きい」という意味合いを含め、隠ぺいしつつメディアは高橋尚子を表象した。スポーツフェミニズム研究者の飯田によれば、シドニーオリンピック時の新聞の見出しから分析をしたところ、以下の結果が見られたと言う⁴⁴。①女性競技者は名前や愛称で表現される ②女性競技者を支える男性 ③娘からミセスへ ④女性役割への期待の四点が特徴として挙げられている⁴⁵。この中で私は②女性競技者を支える男性という点を強調したい。高橋尚子と小出義雄の「関係」を高橋尚子が「女性」という点を強調することで、男と女の差を明瞭にする。高橋尚子の活躍に日本の女性は喜ぶ。また同時にメディアが高橋尚子の表象に小出義雄を取り込むことで、スポーツにおけるヘゲモニーを男性は保持できる。故に男性もメディアを通しての高橋尚子の活躍に喜ぶ。これは一種の象徴的暴力とも言える。

話を戻せばこの2000年という時代に、高橋尚子の活躍が注目を浴びるのには必然性があったと言える。この時代背景こそが、高橋尚子と小出義雄がセットに語られ、「関係」の表象の中身が変容した要因であった。また高橋尚子を代表とする2000年のシドニーオリンピックというスポーツのビッグイベントは、日本の英雄像の変遷の象徴となった。

44 飯田貴子『メディアスポーツとフェミニズム』2002 橋本編 『現代メディアスポーツ論』(世界思想社,2002)p.82~85

45 ①は高橋尚子もQちゃんという愛称で呼ばれていたことから分かる。②は高橋尚子、谷亮子は「娘」と表象されたことがあり、シドニーオリンピック女子柔道で銀メダルを獲得した檜崎選手に「ミセス」という表象があったことを飯田は同論文の中で示している。④は上述の小出の発言に見られるように、「お母さんになったら子供に自慢できる」などの表象がその一例であろう。

結論

1-1. 立てることが難しくなったナショナルヒーロー像

これまでに見てきたように、王貞治から始まったナショナルヒーロー像は1980年代に受賞した三人のスポーツ選手にも引き継がれた。しかしその後の2000年に国民栄誉賞を受賞した高橋尚子の時のナショナルヒーロー像は、以前のものと違った。圧倒的な実力を持っていること、国民が期待する人間像という英雄の要件に変わりはない。だが高橋尚子の表象を見た結果、国民が理想とする努力のあるべき姿と理想の人間関係像という二つの要件が変容したことが分かった。変容の要因は経済成長、ジェンダーという時代的背景から考えられる。

2000年から約10年が経ち、産業構造や経済状況など時代がまた大きく変わった。20世紀末と今では、私たちを取り囲む環境は大きく違ってきている。個人の考えが拡散してきて、ナショナルヒーロー像を立てるのが難しくなってきたのは事実である。だがいつの時代でも、国民はナショナルヒーローを求める。イチローへの授与の打診も、ナショナルヒーローを求めている例の一つと言えるだろう。

1-2. これからのスポーツにおける国民栄誉賞のあるべき姿

ナショナルヒーローを国民が求めることは、いつの時代においても変わらない。しかし現在そのナショナルヒーローと国民栄誉賞の関係が良好でない。特にスポーツにおいて、その傾向は顕著だ。初めに述べたようにスポーツ選手個人にとって、国民栄誉賞は国が与える最高の賞だ。

王貞治というナショナルヒーローを表彰するために、国民栄誉賞は作られた。それは明確な選考基準がある訳ではなく、記念品は貰えるが受賞後の選手の生活を保障するようなものでもないことは初めに述べた。これらを考慮した上で個人の価値観も拡散してきている現代の時世をも踏まえ考えると、国民栄誉賞をスポーツ選手が受け取るメリットはあまりない賞なのかもしれない。価値観が拡散しているゆえに自分の価値観にそぐわないスポーツ選手が、ナショナルヒーローとして表彰された時に議論が起こる可能性は高い⁴⁶。また国民栄誉賞受賞の条件として、受賞者は国民に敬愛されていなければならない。偉業達成直後で終わりであれば良いが、スポーツ選手は引退してからも生活がある。賞が金銭面などの生活を保障してくれればまだ良いかもしれないが、偉業達成後の残りの人生で国民の期待を裏切ることが出来ないという重圧を常に持ち、生活を送ることは不便であろう。

上記の通りただやみくもにでも困難を「努力」で乗り越えるのが、昭和では理想像となっていた。国民栄誉賞も選考基準が分かりにくい上に、受賞者であるスポーツ選手の受賞後の生活が考慮されていない賞だった。つまり国民栄誉賞は、“努力表彰”的側面が強かつ

⁴⁶ 実際に高橋尚子が国民栄誉賞を受賞した2000年に、「田村亮子には何故与えないのか。」という声が首相官邸に多数送られた例がある。田村亮子にはこの年、内閣総理大臣顕彰が贈られた。『朝日新聞』2000年10月24日

た賞だと言える。1991年以前の時代と、“努力表彰”の国民栄誉賞は親和性が高かった。要するに国民栄誉賞は、昭和の産物であった。

最後に今までの分析を踏まえ、スポーツから見たこれからの国民栄誉賞のあるべき姿を提言したい。

2000年の高橋尚子の「努力」の表象から分かるように、楽しく科学的な「努力」が重要視される時代へと移り変わってきた。つまり合理的な「努力」をすることが、あるべき「努力」の理想像となってきた。したがってこのような時代だからこそ国家も非合理的な“努力表彰”をするのではなく、合理的な表彰を行える国民栄誉賞に変えるべきだ。スポーツ選手表彰の国民栄誉賞は、一貫性を持った賞に変わる必要がある。

参考文献

<書籍>

- 川島浩平『名誉感覚の日米比較—オリンピックアスリートの栄光と文化・人種・権力—』2005
中村敏雄編『スポーツにおける名誉や称号』創文企画、2005
森田浩之『メディアスポーツ解体 <見えない権力>をあぶり出す』日本放送出版協会、2009
橋本純一『メディアスポーツヒーローの変容と誕生』2002 ならびに飯田貴子『メディアスポーツとフェミニズム』2002 橋本編『現代メディアスポーツ論』世界思想社、2002
王貞治『回想』日本図書センター、1980
山下泰裕『指導者の器』日経BP社、2009
衣笠祥雄『水は岩をも砕く』KKロングセラーズ、2008
衣笠祥雄『野球の神様がいた球場 広島市民球場とカープの軌跡』ベースボールマガジン社、2008
千代の富士貢 向坂松彦『私はかく闘った 横綱千代の富士』日本放送出版協会、1991
九重貢『綱の力』ベースボールマガジン社、2011
黒井克行『高橋尚子 勝利への疾走』講談社+α文庫、2006
高橋尚子『風になった日』幻冬舎、2001
竹内宏 編者『アンケート調査年鑑 2001年版』並木書房、2001
内閣府『平成22年度版経済財政白書』日経印刷株式会社、2009
城繁幸『若者はなぜ3年で辞めるのか? 年功序列が奪う日本の未来』光文社新書、2006

<新聞>

- 『朝日新聞』1977年8月18日、1977年9月1日、1977年9月4日、1977年9月5日
1978年8月5日
1984年4月19日、1984年9月29日、1984年10月9日
1987年6月23日
1989年7月6日、1989年9月29日
1992年5月28日、1992年7月29日
1993年2月26日
1996年9月3日
1998年7月7日、1998年10月2日
2000年9月25日、2000年10月24日、2000年10月31日
2001年10月27日
2004年10月8日
2009年1月24日、2009年7月2日、2009年12月23日
『毎日新聞』1987年6月19日、1987年6月23日
1992年7月29日
2009年1月24日、2009年7月2日
『読売新聞』1996年9月3日

2009年12月23日

※新聞は参考、引用する順番でなく時系列で整理した。

<雑誌>

『Number』106号、1984年8月20日

『Number』271号、1991年7月5日

『Number』507号、2000年10月5日

謝辞

多くの方に支えられて、私は本研究を進めることが出来ました。

まず著者の論文作成を指導して頂いた小熊英二総合政策学部教授に感謝の意を表したいと思います。高校まで受けていた社会科がいかに通りの社会の見方であったか、小熊先生の講義を聞く度に思い知らされました。毎回の授業が新しい発見でした。楽しくて、また講義を理解して復習するために必死でメモをとった講義のレジュメは、私の大学時代の宝物の一つです。

次に村林裕総合政策学部教授に御礼申し上げたいと思います。私が生きていない時代のスポーツについて、村林さんに教えて頂いたことは着想のヒントとなりました。

最後に私が所属する学生団体 SMRG [Sports Management Research Group] のメンバーにも謝意を表します。ミーティングの時間に本研究の発表をして、質問やコメントをくれたことはとても役立ちました。また何よりもこの団体で活動してきた4年間があったからこそ、問題意識が生まれ、本研究を始めるに至りました。学問的に成熟した論文とはとても言い難いですが、SMRG で学んだことを少しでも形にして残したいという感謝の思いも込め、この論文を書きました。暇な時にでも読んで頂けたら嬉しいです。本当に4年間ありがとうございました。

改めて皆様に謝意を表し、謝辞とさせていただきます。